

国際インターンシップ報告書

人文社会科学研究科 国際公共政策専攻

中村 祥代

(1) インターンの目的

一つ目の目的は、自分の進路のについて考えるためである。卒業後、途上国で開発関係の仕事に就きたいと考えていた。開発に関わる仕事は大きく分けて、国連や JICA などの ODA によって開発援助をコーディネートする官の仕事と、民間企業の直接投資やビジネスを通して途上国の経済成長や生活の向上につながる民間の仕事がある。インターン先の企業は、ODA 案件と純粋なビジネスの案件の両方に関わる会社であり、官民両方の開発の仕事に携わることができるといえる。2019 年に就活を控え、自分がどのような仕事をしたいかを実際に体験することで卒後のキャリアを考えようとした。

二つ目の目的は研究のフィールドワークの実施である。修士論文のテーマは、ガーナの物売りビジネスである。具体的な研究課題を探しつつ、物売りを対象に文化人類学的手法でフィールドワークを実施した。

(2) インターンシップの概要

インターンシップ先：Quay Consult

会社概要：Quay Consult では、ガーナ人が設立したコンサルティング会社である。日本企業の ODA 事業をサポートする、いわゆる開発コンサルと、ガーナに進出する日本企業をサポートするビジネスコンサルの 2 つの事業を行っている。

ODA の案件では、JICA による道路や太陽光発電などのインフラ事業が中心で、JICA、日本の開発コンサル企業、ゼネコンや商社などと提携している。業務としては、免税の申請手続きや、企業と政府機関との会議などの調整を行う。日本の開発コンサルに委託されて現地での調査にあたることもある。ビジネス案件では、日本のドローン会社がガーナに参入しており、Quay Consult が業務をサポートしている。ドローンによる道路や鉱山の点検・パトロールを主な事業としており、ガーナで道路を建設する日本のゼネコンや関連省庁、採掘会社などを相手に事業を展開しており、Quay Consult は事業・市場調査や、MOU などの契約書の申請・手続きなどを行っている。

インターンでは基本的に、ODA 案件に携わるガーナ人コンサルタントとドローンビジネスを展開する日本企業の社員のアシスタントとして、リサーチや会議の同行、企業に提出する報告書の作成、メールの作成などを行った。

(3) フィールドワークの概要

ガーナでは雇用の 80%がインフォーマルセクターだといわれている。その仕事の一つに路上の物売り (street vendors) がいる。彼らは道路で渋滞や信号で止まっている自動車や

歩行者を相手に、食料品や日用品、インテリアなどの商品を幅広く販売している。今回のフィールドワークでは、事業形態、商品の入手ルート、売り上げ、賃金、生活状況などの聞き取り調査を行い、彼らの販売行動の観察を行った。

(4) 達成度

■ インターンシップ

インターンシップでは、日本人だけでなく、ガーナ人にも対応する場面が多く、ビジネスレベルの英語が求められた。ガーナ英語は日本や欧米とは少しことなり、コミュニケーションに苦勞した。また、JICA や WFP の方、メーカーや商社、開発コンサルの方たちと一緒に実際に働いたり、実際に現場で仕事している話を聞いたりして、どんな仕事があるのか、どのような仕事が自分に向いているかをある程度判断することができた。インターン先からは来年度もインターンしてくれないかという要請をいただいた。

■ フィールドワーク

物売りが多い道路で物売りに聞き取り調査・観察を行った。事業形態や商品の選択、売り上げと賃金などを明らかにした。調査場所に何度も足を運び、調査に協力してくれ物売りと交流を深めた。結果として5人の物売りの協力を得て、商品の仕入れの同行や事業主との面会を果たした。物売りの中には英語が不十分な者もいるので、彼らが分かりやすい英語を心掛ける必要があった。



(5) 今後の方針

インターンを通して、志望業界や業務を絞れたので、インターンの経験をもとに就活を進めている。研究に関して、学部時代の経済学とは異なる文化人類学的手法で研究を行っている。人類学の知識不足を感じているので、基本を復習し、指導教授とともに研究計画を見直したい。また、物売りとの円滑なコミュニケーションを積むために、彼らが分かりやすい単語・発音をあらかじめ調べておく必要がある。筑波大学にはアフリカ出身の学生が多いので彼らと交流するのものの一つの手段である。来年の2回目のフィールドワークで成果を得るために、日本でできる限りの準備を進めたい。